

中日 春秋

空。どこまでも、どこまでも海  
さなり。／散乱する透明な水の  
／微粒子の色。晴れあがった  
朝の波の色。空色。水色。くくく。二年前  
に七十五歳で逝った長田弘さんの『最  
後の詩集』(みすず書房)の冒頭を飾  
るのは、「シシリアン・ブルー」と題  
された鮮やかな詩だ。くくく。空な  
のか、どこから海なのか。／見えるす  
べて青。すべてちがう青。／藍、縹、  
紺、瑠璃、すべてが、／永遠と混ざり  
あっている。くくく。読めば、淀み濁った  
心が、青く染め上げられていく。くくく。  
もある。くくく。空、海、そして地球。その青  
を、私たちの目は、どんな仕組みでと  
らえているのか。なぜ私たちは、青を

見るのか。名古屋工業大  
学の神取秀樹教授らはそんな謎に十年  
がかりで取り組み、世界に先駆けて解  
き明かしたという。くくく。霊長類の視細胞に  
ある「光センサータンパク質」を調べ  
上げ、構造を解析した。それで浮かび  
上がったのは、水の大切な働き。赤や  
緑を感じるタンパク質では水の分子が  
一しすしはらばらに働いているが、青  
を見分けるタンパク質では、三つほど  
の水の分子が集まって小さなかたまり  
をつくり、独特の役割を担っているこ  
ろ分かったそうだ。くくく。空の青、水の青を感  
じるため、私たちの瞳の奥でひっそり  
と働く水の分子たち。自然がくれた素  
敵な贈り物である。

2017.8.5

企画広報課  
広報室

8月7日 (月)

2017/08/05 東京新聞 にも同様の掲載あり